

國學院大學学術情報リポジトリ

『君主の訓育』第1巻を読む：
1190年代前半のギラルドゥス・カンブレシス

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永井, 一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001046

『君主の訓育』第1巻を読む－1190年代前半のギラルドゥス・カンブレシス

■ 永井 一郎

▶ 要 約

中世ウェールズを代表するギラルドゥス・カンブレシスは早くから故郷セント・デイヴィズ司教になる夢を抱いていた。1184年にヘンリ二世の求めに応じて王宮付き司祭となった彼は、王のウェールズ政策のために尽力しながら、司教昇進のチャンスをうかがっていたが、王はギラルドゥスを司教に任命するとウェールズ王家との血縁を利用して自分の政策を邪魔する存在になるのではないかという疑いをもち、結局昇進を認めないまま死去した。ギラルドゥスは昇進の足がかりを失って1191年に王宮を辞した。

本稿はこの直後にギラルドゥスもっていた思考や心境を、同時期に彼が書きあげた『君主の訓育』第1巻から読み取る試みである。また、彼は1198年以降イングランド王宮を相手とした論争をローマ教皇の面前で展開しているので、本稿はその準備がいつころから始められたのかを探る作業でもある。

結論を簡潔に述べると、1191年のギラルドゥスはイングランド王宮に対する姿勢、司教就任のための新しい戦略、ウェールズ人支配者たちとの関係など、基本的なスタンスで迷っていた可能性が高い。また、彼が描いている理想的な君主像は積極的な徳目とこれにブレーキをかける消極的な徳目とのバランスを重視するもので、王宮での経験がここに強く反映していると推測される。

▶ キーワード

ギラルドゥス・カンブレシス、『君主の訓育』、1190年代のウェールズ、イングランド王宮のウェールズ人差別、「セント・デイヴィズ問題」

目次

- I はじめに
- II 1190年代のギラルドゥス
- III 「オリジナル序文」
- IV 第1巻
- V おわりに

I はじめに

ギラルドゥス・カンブレシス（Giraldus Cambrensis, 本名 Giraldus Barii）は中世ウェールズを代表する文筆家である。80年近い生涯の間に多くの著述をし、その大部分が今日まで伝えられている。本稿で私は、『君主の訓育（De Principis Instructione）』⁽¹⁾の第1巻を読んで、その構想・執筆時にギラルドゥスがどのようなことを考え、感じていたか探りたいと考えている。著作全体ではなく第1巻のみを取り上げるのは、本稿の関心が1190年台前半のギラルドゥスにあるからで、このように時期を限定する理由は本節後半で説明する。

まず『君主の訓育』全体について、2018年にバートレット（Bartlett, R.）が出版した校訂・英訳本『ジェラルド・オヴ・ウェールズ（著） 君主の訓育（Gerald of Wales Instruction for a ruler, De Principis Instructione）』を利用しながら簡単に紹介する⁽²⁾。

ギラルドゥスはこの著作で君主が身につけるべき徳目について自分の考えを述べている。執筆が開始されたのはおそらく1191年で、完成したのは1217年ころである。完成に四半世紀もかかっている。

献呈先は記されておらず、その点からすると一般読者向けに書かれた形式になっている。しかし、君主が主題であること、また、彼がイングランド王宮付き司祭の職を辞した直後に書かれていることを考えると、公表すれば王宮の人々の目に触れると予想していたはずである。むしろ、彼の念頭にあった読者は主としてイングランド王宮の集う人々であったと考えてよい。実際彼は第1巻ができ上がった時点で王宮の人々がこの書をどのように受け止めるか心配し、迷った末に当面伏せておく決心をしている。この点については後に説明する。

同書は3巻構成で、第1巻は君主がもつべき多くの徳目を挙げ、各徳目の重要性を先人たちの記述例を紹介しながら説いている。第2、第3巻でギラルドゥスは同時代の君主たちの行状について直接・間接に知っていたエピソードを、また、古代ユダヤからギリシャ・ローマ時代の支配者たちの姿を多様な著述家たちの文章によって紹介している。第1巻は理論編で、その論拠となる事例が第2、第3巻にまとめられていると言ってよい。彼は生涯で何点か「鑑」を著しているが⁽³⁾、『君主の訓育』はそのひとつである。

ギラルドゥスは構想の段階から理論編と事例編の組み合わせを念頭に置いていたと思われるが、完成までに長期間かかったからだろう、2つの編の整合性は決して充分ではない。第1巻と第2、3巻を比較すると、内容や各章の構成が大きく違っていて、2つの著作を

無理に結合したような印象を受ける。加えて、各巻に含まれている事例は、完成までの間に次々と追加されていったようで、直前の事例と何らかの関連性はあるが、章全体のテーマとは無縁に見える記述がしばしば見られる。

他の著作でもギラルドゥスは完成後に追記を重ね、そこから第2版を作っている場合があるが⁽⁴⁾、『君主の訓育』は第1版のみ、しかも、後述のようにマニュスクリプトは1点しか残されていない。したがって、版やマニュスクリプトを比較して追記部分を確認することはできない。

完成した『君主の訓育』は大部な著作になっていて、パートレットの校訂本では原文だけで360ページを超している。しかも、現存マニュスクリプトはオリジナルではなく後世の写本であるためか、ラテン語がかなり乱れていて意味不明に近い文章や語句も含まれている⁽⁵⁾。こうした事情から、これまで同書は読者から敬遠されてきた。また、読み方によってはギラルドゥス独自の内容が少なく見えるため、彼の作品の中で最も退屈と評した人もいる⁽⁶⁾。

ただ、ギラルドゥス自身は構想の段階から同書を重視していて、自信作と見なしていた可能性もある。とすれば、ギラルドゥスに関心をもつ者にとって無視できない著作のはずである。読みやすくなれば研究者が注目する状況にあったわけで、この意味でパートレットの校訂・英訳本の出版は朗報である。私の場合で言えば、難解なラテン語が越え難い壁となっていたが、英訳を手がかりにすれば何とか利用できるようになった。

これまで『君主の訓育』はどのように読まれてきたのか。上記から予想されることであるが、同書に関する研究は僅かであり、この点はアイルランド、ウェールズに関する先行4著作の場合とまったく違っている⁽⁷⁾。

1982年にパートレットが著作『ジェラルド・オヴ・ウェールズ、1146～1223 (Gerald of Wales, 1146～1223)』の中で短いがよくまとまった論考を発表するまでは⁽⁸⁾、『君主の訓育』は本格的な研究対象になっていなかった。それまでのギラルドゥス研究者は主として第2巻に記されているヘンリ二世批判に関心を寄せ⁽⁹⁾、他の記述、なかでも全体のテーマである君主の徳目にかんする議論はほぼ無視していた。

パートレットがこの論考で提示した結論は次の3点にまとめることができる⁽¹⁰⁾。①『君主の訓育』全体を貫くテーマないし主人公はヘンリ二世である。②第1巻では君主が身につけるべき徳目が多数挙げられているが、これは君主の理想像であって、第2、第3巻で展開されるヘンリ二世批判のための鑑の役割を担っている。③ヘンリ二世批判はギラルドゥスが設定した筋書きに従って展開されている。すなわち、前半生期の王は神に愛されていくつか決定的な幸運に恵まれたが、カンタベリー大司教ベケットの暗殺に関与し、第3回十字軍参加を渋るうちに神の加護を失い、晩年は息子たちの反逆など悲惨な運命に

苦しむことになったというのである。いずれの点も説得力をもち、今日『君主の訓育』を読む者の共通理解となっている。

最近ギラルドゥスに関する優れた論文集が出版された。ヘンリ (Henry, G.) とマクムレン (McMullen, A. J.) 編著の『ジェラルド・オヴ・ウェールズ——中世の一著述家・評論家に関する新しい展望 (Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic)』である⁽¹¹⁾。ギラルドゥスに関心をもつ 15 人の研究者がそれぞれの専攻分野からギラルドゥスを論じている。いずれも新しい視点を提示しており、中に何点か私にとって重要な意味をもつものが含まれている。しかし、『君主の訓育』については新しい知見は出されていない。むしろ、ヘンリが同書は現在いわば無主地であり、これから本格的な研究が始まるのだと言っている点が目立つ⁽¹²⁾。

こうした状況の中で、上記校訂・英訳本に付されたでパートレットの「序論」は私たちにとって最大かつ最良の手がかりとなる⁽¹³⁾。

次に、史料状況をパートレットの説明に従って紹介しよう。

『君主の訓育』の現存マニュスクリプトは 1 点のみ、British Library, Cotton MS. Julius B xiii, fos. 48~173 である。これはオリジナルではなく 14 世紀の写本であるが、欠落部分はない。また、後世の追加もないと判断されている。したがって、私たちはギラルドゥスが最終的に仕上げた全文を見ていることになる。

現存テキストは 3 つの巻と各巻に付された序文によって構成されているが、これとは別に、パートレットが「オリジナル序文」と名付けたかなり長い記述が残されている。マニュスクリプト Cambridge Trinity College MS. R. 11, fos. 86~92 である。さらに、現存しない同書のマニュスクリプトが 15 世紀に存在していたことを示す記録があり、そこに「オリジナル序文」の全文ないし一部が含まれていたことが分かる。

こうした史料状況がなぜ生まれたのか。第 1 巻の執筆時期とかかわらせてパートレットは次のように推測している⁽¹⁴⁾。

まず、『君主の訓育』に関する最も早い言及は、1191 年に発表された彼の著作『ウェールズ旅行記 (Itinerarium Kambriae)』第 1 版に見られ、ヘンリ二世に関して「『君主の訓育』で述べたように」と記されている。しかし、第 2 版ではこの部分が「述べられるように」と未来形に直されており、1194 年ころに完成した『ウェールズ案内 (Descriptio Kambriae)』にも同じ未来形の言及が含まれている。『ウェールズ旅行記』第 1 版の表現は単純な誤記であると判断すると、1191 年までに『君主の訓育』の構想は固まっており、執筆も始まっていた可能性が高いが、1194 年でも完成していなかったことになる。

他方、「オリジナル序文」は、第 3 節で紹介する内容から判断して、ギラルドゥスが王宮での職務を辞した直後に書かれたことはまず間違いない。煩わしい王宮生活からの解放

感が行間に満ちているからである。さらに、第1巻末尾には、第2、第3巻はまだ完成していないが、ここで一度筆を置くと記されている⁽¹⁵⁾。したがって、第1巻は、第2、第3巻とは別に一度完成されたこと、また、その時期は、ギラルドゥスが通常本文をまとめた後で序文を書いていることから判断して、王宮を辞した直後であったと推定される。

上記のように『君主の訓育』全体の執筆期間は四半世紀にもなるが、実際のプロセスで言えばまず第1部が1190年代初めに完成し、長い中断期間を置いて、おそらく1210年台に第2、第3巻が書き継がれたのである。2つの執筆時期の間にギラルドゥスの環境が大きく変わったことを考えると、第1巻を独立の著作として扱う可能性が出てくる。

ギラルドゥスが王宮付き司祭の職を退いた年は最近まで必ずしも明確ではなく、研究者によって多少違った推定がされている中で⁽¹⁶⁾、これまで私は1194年として議論を組み立ててきた。その場合、『君主の訓育』第1巻が完成したのは1194年以降となり、本節の冒頭に記した時期設定は1190年代前半よりも中葉とするのが自然である。私があえて前半としたのは、最近になって彼が王宮を去ったのは1191年であることを示す資料が発掘されたからである。

バートレットの紹介に従うと⁽¹⁷⁾、1191年のミカエルマス以降ヘレフォードに置かれた王庫からギラルドゥスの名前で1日5ペンスの支給が開始されたことが分かり、これは王宮を辞した役人に対するいわば恩給であった可能性が高い。ヘレフォードは王権にとってウェールズ支配の根拠地であり、ギラルドゥスが管理していたブレコン（Brecon）大助祭区と隣接していたことを考えると、彼が同年秋までにウェールズへ帰っていたことはまず確実であろう。

さらに、ギラルドゥスは『自叙伝（De Rebus a se Gestis）』の中で、1191年10月かその少し後に王子ジョンからサンダフ（Llandaff）司教になるよう求められたが断わったと記していて、これは王宮を辞した後のほうが自然に理解できる⁽¹⁸⁾。

以上を踏まえて、もうひとつ説明すべき点がある。それは、「オリジナル序文」が完成した『君主の訓育』では削除されている理由である。ギラルドゥスはしばしば著作を構成する巻それぞれに序文を付し、さらに全体に対する序文を冒頭に置いているから、同書の場合も全体序文が書かれていても不思議ではない。しかし、第3節で紹介するように「オリジナル序文」には王宮を辞した直後に彼が抱いていた思いが生々しく書き込まれており、これを20年以上経た時点に公開するといかにも時代錯誤になってしまう。そこで彼は自分の意志で削除したのではないか⁽¹⁹⁾。

以上バートレットの議論を紹介してきたが、いずれも説得力をもち、受け入れてよいだろう。本稿にとって重要なのは、『君主の訓育』第1巻のみでも「オリジナル序文」と組み合わせることでひとつの著作をみなすことができる点、および、このセットは1190年

台前半のギラルドゥスを探るよい手がかりになるという点である。

ここで、なぜ本稿のテーマを1190年台前半のギラルドゥスの思考に定めたのか、先行拙稿とかかわらせて説明しておこう。

本稿には2つの課題が設定されている。第1は、ギラルドゥスの生涯を追う仕事を、これまで細かく検討していない時期を取り上げて補足すること、第2は、彼が王宮を辞してから、王宮と対峙した「セント・デイヴィズ問題」⁽²⁰⁾を提起するまでの間にどのような政治的スタンスをもっていたか探ることである。

私はこれまで3つの拙稿でギラルドゥスの生涯を部分的に紹介している。「ギラルドゥス・カンブレンシスのキャリアデザイン」,「ギラルドゥス・カンブレンシスと『セント・デイヴィズ問題』」,「ギラルドゥス・カンブレンシスと『ブレコン大助祭問題』」である⁽²¹⁾。いずれも彼の生涯を通観するものではなく、それぞれ、生誕から王宮を辞するまでの前半生期,「セント・デイヴィズ問題」の時期,引退後ブレコン大助祭の職録を巡って甥たちと争った時期を扱っている。問題はこれら拙論が扱っている時期に間隙があり、推測によるつなぎの説明しかなされていない点である。特に第1,第2の拙稿の間隙、すなわち、本稿が取り上げる時期にギラルドゥスが大きな方向転換を準備していたと推測しながら、彼が実際にどのように考えていたか史料に基づいて探索していない。この点は他の研究者も同様で、その最大の理由はギラルドゥスが『自叙伝』でこの時期について僅かな記述しか残していないからである⁽²²⁾。私は『君主の訓育』第1巻を利用すればこの空隙を多少とも埋めることができると期待している。

第2の課題、すなわち、ギラルドゥスが生涯の各時期にもっていた、あるいは、提示していた政治的スタンスを私は「『アイルランド地誌』を読む——著者ギラルドゥスの執筆意図を手掛かりに」,「『アイルランド征服』を読む——ギラルドゥス・カンブレンシスの執筆意図にかかわらせて」,「『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレンシスの政治的スタンス」,「ギラルドゥス・カンブレンシスの帰属意識」で順次追ってきた⁽²³⁾。得られたいくつかの仮説の中で本稿との関連で重要なのは、彼がイングランド王宮との関係で政治的スタンスを変えたという点である。というのは、ここで私が取り上げている3つの著作はいずれも彼が王宮で勤めていた時期に構想、執筆、発表されているのに対し、『君主の訓育』第1巻は辞任直後の作品だからである。

王宮でギラルドゥスは王やその周辺の人々の自分に対する評価を重視し、そこに照準を当てた政治的スタンスを誇示していたのだが、辞任とともにその必要はなくなる、あるいは、大きく減少したと考えるのが自然であろう。換言すれば、『君主の訓育』にはこれまで私が明らかにしてきたのと違う政治的スタンスが示されている可能性が高いのであって、この差異の究明は私にとって大変重要である。先行拙稿の仮説が当たっているかどうか判

断するのに役立ち、さらに、1198年以降彼が王宮と対峙した時のギラルドゥスの思考とどのような関係があるのか探る出発点となるからである⁽²⁴⁾。

Ⅱ 1190年代のギラルドゥス

『君主の訓育』第1巻と「オリジナル序文」を検討する前に、ギラルドゥスが王宮を辞してから「セント・デイヴィズ問題」に取り掛かるまでの間に、どのような立場ないし状況にあったのか確認しておく必要があるだろう。

この時期設定は前節で挙げた本稿の検討時期よりも長く、第1巻の構想・執筆時期に必ずしも合致しない。しかし、以下で紹介するように、手掛かりとなる記述が僅かで、その大部分が何年のことか分からないという史料状況があり、本稿の目的に即した時期設定は難しい。こうした判断から、本節のタイトルもあいまいなものとなっている。

ギラルドゥスの生涯を部分的にでも伝える記述はほぼ次の3つの著述に限られている。いずれも彼自身の記述である。『ウェールズ旅行記』、『自叙伝』、『セント・デイヴィズ教会の権利と地位——ある対話 (De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogue)』である⁽²⁵⁾。この中で1190年代を扱っているのは『自叙伝』のみ、その『自叙伝』にもこの時期のものと推定できる記事は数点しか含まれていない。自分の行動、特に自尊心にかなう行動については多くの記事を残しているギラルドゥスにしては珍しい時期である。

検討の対象となるのは次の4つの記事である。いずれも要旨を紹介する。

- (1) ギラルドゥスがイングランド王宮を離れたこと。王宮での煩わしい仕事や人間関係から解放されて、これから学問に専念できると喜びを感じたこと⁽²⁶⁾。
- (2) 王子ジョンからバンゴル (Bangor) とサンダフの司教になるよう誘われたが、いずれも学問に専念したいと伝えて断わったこと⁽²⁷⁾。
- (3) 三度目のパリ留学に出発したが、英・仏間で戦いが始まったため断念し、リンカーンでの研究生活に切り替えたこと。リンカーンは優れた神学者たちが集まり、自分にふさわしい都市であったこと⁽²⁸⁾。
- (4) ブレコン近くに住む老隠者に会い、大切なのは学識よりも真の信仰であると気づかされたこと⁽²⁹⁾。

以上の記述に従えば、1190年代のギラルドゥスは神学などの研究に打ち込んでいたことになる。彼は、ブレコン (Brecon) 大助祭の職務は別として、権力にかかわる仕事をしていなかったと考えてよい。しかし、彼の思考は研究以外の分野にも及んでいたと私は

推測する。その根拠となる点を推定も含めて挙げておこう⁽³⁰⁾。

ギラルドゥスは表立った活動を始めた時点で、将来自分は故郷のセント・デイヴィズ教会を司教として指揮するという明確な願望をもっていた。伯父デイヴィッドは同教会の司教であり、彼自身は南ウェールズで卓越した学識をもつと自負していたから、夢の実現は間違いないと考えていた。

実際 1176 年にデイヴィッドが死去すると、セント・デイヴィズ教会参事会は彼を筆頭候補として王宮に推挙した。しかし、イングランド、ウェールズの司教選任権をもつヘンリ二世は、ギラルドゥスを南ウェールズ聖界の頂点に置くと血縁のあるウェールズ人支配者たちと結託し、ウェールズ統治を妨げる危険があるという理由で、任命を拒否した。これを知ったギラルドゥスは、自分が王の忠実な臣下であることを行動で示して王の疑いを晴らそうと計画した。そして、王宮付き司祭に任命されたのをチャンスととらえ、以後王のアイランド・ウェールズ政策を助けた。王子ジョンのアイランド遠征に同行し、むなしい助言を繰り返したのも、カンタベリー大司教ボードウィン (Baldwin) を先導してウェールズ各地で十字軍参加勧奨をしたのもヘンリ二世の命を受けてのことである。

しかし、王はギラルドゥスの職務遂行を評価しながらも上記の疑いを解くことはなく、また、次のセント・デイヴィズ司教選定が必要になる前に死去した。ギラルドゥスは働きかける相手を失い、後継の王たちをあまり信頼していなかったから、王の愛顧や評価を手掛かりに司教に就任するという計画をあきらめざるを得なかった。

1191 年にギラルドゥスが王宮を去ったのはこれまでの計画が失敗に終わったからだと言ってよい。当然彼は強い不満ないし失意の状態にあったはずである。『自叙伝』のギラルドゥスは、上記のように王宮の煩わしさから解放された喜びしか記していない。しかし、私は彼がここで全ての心境を吐露しているのではなく、むしろ重要なことを隠しているのではないかと考えている。そして、この疑問から本稿は出発している。

以上は 1190 年代のいわば入り口の状況であるが、出口の時期についても説明すべき点がある。それは「セント・デイヴィズ問題」、より正確に言えば、その準備についてである⁽³¹⁾。

1198 年 7 月にセント・デイヴィズ司教ピーター (Peter) が死去し、次期司教選定作業が始まった。教会参事会はルールに従って候補を複数選び、そのリストを王宮に提出した。複数挙げられているとはいえ、教会が真に推挙しなかったのはギラルドゥスのみであり、これは王宮も充分承知していた。この間リチャード一世が急死し、ジョンが即位するという予想外の事態が発生したが、王宮を切りまわしていたカンタベリー大司教ウォルター (Walter, H) はギラルドゥス拒否の方針を貫き、候補リストをつき返した。1176 年に続いてギラルドゥスの夢は実現しなかったのである。

そこで、1199年6月にギラルドゥスとセント・デイヴィズ教会の主要メンバーは大胆な計画を実行に移した。それは、彼の司教就任と同教会の宿願であった大司教座権の復興をローマ教皇に直接訴え出て、特別の裁可を得るという計画である。もし教皇を説得できればイングランド王宮の意向に反しても彼と教会の夢は実現する。

1190年代との関係で言えば、この計画がいつ、誰によって立てられたのかが問題となる。『自叙伝』の中でギラルドゥスは、自分が次期司教候補に推されたという連絡をうけても、これまで通り研究生生活を続けたいと考えてすぐに動かなかったと述べ、計画の内容を知り、熟慮したうえで、やむなく参加を決意したかのように記している⁽³²⁾。

しかし、当時のセント・デイヴィズ教会でこれだけ大胆で視野の広い計画をつくる力をもつ人はおそらくギラルドゥス以外にいなかった。また、ジョン王が最終的に司教任命を拒否したことを知って教会が直ちに上記計画を公表し、ギラルドゥスにローマへ旅立つよう連絡しているから、この計画は1199年6月より前につくられ、共有されていたと考えてよい⁽³³⁾。実際問題として、西ヨーロッパの聖界、俗界の状況、特にローマ教皇の意向を勘案して立案するのに相当に時間がかかったはずで、これに彼自身が王宮との全面対決を覚悟するまでの時間を加えると何年か要する大事業である。1190年代後半のギラルドゥスにとってこの問題は最大の関心事であったと可能性が高い。彼は研究と並行してこの危険を伴う計画を教会の主要メンバーとともに秘かに進めていたのではなからうか。

以上から私が1190年代のギラルドゥスに注目する理由は明らかであろう。なぜか彼は沈黙しているが、1191年から97年にかけて生涯の画期となる大きな計画が彼の頭の中で芽生え、生育し、結実していった。具体的に言えば、まず、セント・デイヴィズ司教就任の夢を捨てるかどうか決断し、追究し続けると決意した上でどのような新しい方策があるか探り、探り当てた後は当時の聖界、俗界の政治状況をうかがいながら計画の実現可能性と危険性を見極める作業が進められていたのである。

そうした重要な時期の前半に彼はどのようなことを考えていたのか、これを探るのが本稿の目的であり、そのために前半期の著作である『君主の訓育』第1巻を読むのである。王宮を辞した後の彼は、次節で確認するが、それまで王宮向けに維持してきた政治的スタンスから解放されて、比較的自由に自分の思考や感情を表現できる状況にいたので、同書には手掛かりとなる記述が含まれている可能性が高い。

1190年代のギラルドゥスは多くの多様な著述を残している。そのうちで1197年まで、すなわち、次期司教選定の作業が始まる前の時期に発表ないし部分的にでも執筆されたと分かる作品を挙げておこう⁽³⁴⁾。

『君主の訓育』(1191年)、

『教会の鑑 (Speculum Ecclesiae)』(1191年に執筆開始、完成は1219年以降)、

『ウェールズ案内』(1194年第1版発表),

『メネヴィア(=セント・デイヴィズ)大司教聖デイヴィッド伝(Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi)』(1194年),

『ヨーク大司教ジョフレイ伝(De Vita Galfridi Archiepiscopi)』(1195年),

『聖エセルベルト伝(Vita Sancti Etherberti)』(1195年),

『教会の宝石(Gemma Ecclesiastica)』(1197年)

『ウェールズ旅行記』第2版(1197年)。

なお、次稿では、1194年から97年に書かれた著作をいくつか取り上げて、「セント・デイヴィズ問題」を提起する前の数年間にギラルドゥスがどのようなことを考えていたのか探りたいと考えている。

Ⅲ 「オリジナル序文」

本節は『君主の訓育』第1巻完成時に付されていた「オリジナル序文」⁽³⁵⁾を読み、ギラルドゥスがイングランド王宮辞任直後にもっていた思考や心境を探る。なお、同書全体が完成した時に第1巻に付された「第1序文」は次節で取り上げる。

「オリジナル序文」には大きく分けて6つの事項が記されている。

- (1) 王宮生活の煩わしさ。自分にとって王宮はいろいろな心痛に悩まされる場所であった。
- (2) 主君ヘンリ二世は自分の尽力に一度も報いることがなかった。結果として自分は王に騙された。
- (3) 王宮に広まっているウェールズ人差別。自分は不当にもウェールズ人と決めつけられた。
- (4) 神学の研究と古代ローマの著作の研究のいずれがより重要か。自分は、甲乙つけがたく、ともに重視すべきだと考える。
- (5) 現在の心境。自分は今の地位と「節度ある生き方(modestia)」に満足している。
- (6) 『君主の訓育』執筆の目的。自分はこの著作によって直ちに報酬や称讃を得られるとは考えていない。大切なのは将来の人々の評価である。

彼の先行著作に付された序文に比べるとやや一貫性を欠く内容構成となっているが、いずれも第1巻の内容との関係を読み取ることができ、その意味で第1巻にふさわしい序文である。第1節で紹介したように、この序文は完成された『君主の訓育』とは別のところ

で発見されているのであるが、両者が連続して、少なくとも第1巻を踏まえて書かれたことは間違いない。

各事項について簡単に説明しておこう。

第1事項について。ギラルドゥスはいろいろな著作で、自分は王宮での仕事よりは研究を好む、王宮生活は苦痛であると繰り返し述べており、目新しい内容ではない。ただ、彼はそう言いながら、王宮付き司祭の地位を司教就任の足がかりに利用しようと考えていたことが分かっているので、表面的な言辞の裏にある彼の真意を汲み取る努力が必要である。

第2事項について。先行する著作でもギラルドゥスは王が約束を果たしてくれないという苦情を述べているが、それとどのように違うか、批判がどこに向かっているか確認する必要がある。

第3事項について。イングランド王宮に集う人々が征服対象であるウェールズを野蛮の地と見なしていたことは間違いない⁽³⁶⁾。ギラルドゥスも『君主の訓育』以前の著作でそうした表現を使っている⁽³⁷⁾。むしろ本稿にとって重要なのは自分をウェールズ人と決めつける人々の偏見を彼がどう受け止めていたかである。

第4事項について。神学とリベラルアーツをめぐる議論は以前から交わされているが、ギラルドゥスがなぜこのテーマを取り上げたのか、私にはよく分からない。また、記された内容は本稿の目的から離れている。

第5、第6事項について。自分が望んでいるのは文筆家としての名声であり、栄達や報酬ではないといった表現をギラルドゥスはよく使っている。しかし、そう言いながら、これまでの著作では献呈先の愛顧を求めており、あからさまな書き方をしていないが、献呈先の支援を得てセント・デイヴィズ司教へ昇進したいと強く願っていたことは間違いない。したがって、第5、第6事項がどこまで彼の本心を伝えているのか、第2事項とも照合しながら確かめる必要がある。

以上を踏まえて、本節では「オリジナル序文」から3種類の記述を取り上げて検討する。すなわち、王宮生活に関する彼の記憶や感想、ヘンリ二世に対する評価、および、王宮の人々がもっていたギラルドゥスに対する偏見である。

王宮生活に関するギラルドゥスの思いはこの序文の冒頭で、それも激しい恨みごととして表明されている。これは、先行著作がまずは献呈先に対する大げさな賛辞から始まり、次いで著作の価値が自信たっぷりに表明されるという書き方になっているのと大きく違っている。第1巻完成時にギラルドゥスは当面公表しないと決めていたので⁽³⁸⁾、他人の目にさらす際の慎みを失い、気持に任せて書いた可能性がある。

以下王宮での生活を評した彼の文章を紹介する。なお、重要と判断した部分は直訳で、他は要旨の形で記す。

(3-1) この世の生活は多様であるが、私に最も強い感情を呼び起こすのは「王宮は心配を、研究は喜びを生む」という言葉である⁽³⁹⁾。

(3-2) 有難いことに状況がようやく変化し、・・・私は心を神に委ねて「難破していた船を港へと航行し始めた⁽⁴⁰⁾。」

(3-3) 私は王宮を辞する決心をし、散在していた蔵書を取り戻した。そして苦勞して自分自身を取り戻し、研究生活を始めた。私は「いわば[恐ろしい]深海[を逃れて]入り組んだ港の静かな一隅に落ち着いた」のである⁽⁴¹⁾。

バートレットは『オリジナル序文』のこうした文章が、王宮を辞した時のギラルドゥスの気持ちを正確に伝えていると述べており⁽⁴²⁾、私も同様に判断する。

聖職者から見れば王宮に集う人々、特に王は時として神をも恐れぬ振る舞いをしたし、何よりも王宮内で繰り広げられた権力争いが彼を悩ませたであろう。また、ギラルドゥスは報償の約束を信じて王のために尽力してきたのであるが、空約束が繰り返される中で、王の晩年には諦めかけていたのではないか。1189年に王が死去し、リチャード一世が即位すると見通しはさらに悪くなった。ギラルドゥスはそれまで王子ジョンと親しい関係にあり、リチャードはジョンと決して友好的ではなかったからである。おそらく彼はリチャードから空約束すら期待できないと判断したのであろう。

このように状況が大きく変化したので彼は最終的に王宮を辞する決心をした、それが1191年であったと私は考える。彼は以前から強く辞任を望んでいて、それが実現して嬉しかったとのみ記しているが、現実はまだ少し複雑であった可能性が高い。

ヘンリ二世に対する評価も彼の先行著作に記されている。私はこれまで初期の3著作を読みながら、時とともに王に対する彼の評価が変わっていく様子を確認している。変化の内容を簡潔に述べると、『アイルランド地誌』では、ヘンリ二世とその息子たちが血統、品性、事蹟など君主の鑑と称えられ、王はアレクサンダー大王に擬せられている⁽⁴³⁾。次の『アイルランド征服』でもヘンリ二世の評価は高く、優れた統治者であると充分認めているが、2つ大きな失敗をしたと述べている。ひとつはアイルランド征服後に総督として送り込んだ人選の誤り、もうひとつは、カンタベリー大司教ベケットの暗殺に関与ないし黙認したことである⁽⁴⁴⁾。『ウェールズ旅行記』になると、当然のことながらアイルランド政策の誤りは消え、代わって、王がローマ教皇の要請にもかかわらず、自ら十字軍に参加しようとしなかったこと、その結果聖地における戦況が悪化したことが批判の中心となっている。さらに、大司教暗殺関与と十字軍不参加が神の怒りを招き、罰として晩年息子たちの反逆に苦しむことになったと言っている⁽⁴⁵⁾。

では『君主の訓育』ではどうか。第1節で紹介したように同書第2、第3巻を貫くテーマはヘンリ二世に対する強烈的な批判であるが、これは彼が晩年にもっていた評価であって、

同じ作品で語られていても「オリジナル序文」の時期の評価は別のものとして検討する必要がある。

(3-4) 私は王ヘンリ二世に呼ばれて王宮で仕えることになったのだが、「王の心はうそをつくことを気にせず、その最大の願望は自分に仕え、従う者の心を騙したり、[約束]をはぐらかしたりして痛めつけることであった。」私は2代の王に10年近く仕えたが、これは無益な時間だった。「彼 [=リチャード一世] が彼 [=ヘンリ二世] の悪徳まで引き継がないように」願うばかりである。

この間「私は彼らから何の益にもならない厄介ごとと誠実さを欠いた空約束以外何も受けとらなかった。というのも、[私が] 業績の重み、文芸の才、尽力によって[彼らから] 何かしかの好意を獲得したとしても、[私に対する] あの疑いが、[すなわち]、危険で疎ましいウェールズ人という名がそれら全てを消してしまったからである⁽⁴⁶⁾。」

これほど強く、遠慮のないヘンリ二世批判はこれまでの著作に見られない。王宮を離れているから可能になった強烈な主張である。加えて2点指摘しておこう。

第1に、ギラルドゥスはヘンリ二世が自分を司教に任命しなかったことをこの時点でも強く意識していて、これは不当だと確信している。制度上は王に任命権があることをよく分かっていたから王の決定そのものを非難できない。そこで、彼は自分の尽力に約束通り報いようとしなかった点を取り上げて、王の品性の問題にまで拡大して見せたのであろう。

第2に、ヘンリ二世に比して息子リチャードに対する評価はいまいきな表現に留められている。これは存命中の王を直接批判するのは危険であるという判断によるのであろうが、もしそうならば、ヘンリ二世に対する非難を後継者たちが知った時に生じるトラブルにも思いをはせていたはずである。「オリジナル序文」は公表できないとギラルドゥスが判断したのは当然であった、

(3-4) にはもう1点ヘンリ二世批判が含まれている。王が彼をウェールズ人ゆえに冷遇したという最後の文章である。しかし、これは他の同様な記述と併せ、王宮の人々がもっていたギラルドゥスに対する偏見として検討するのがよい。

上記のようにヘンリ二世を中心とする王宮の人々は大なり小なりウェールズ人・社会を蔑視していた。彼らにとってウェールズは征服の対象であり、くわえて、野蛮な土地であったから、征服し、文明化するべきという理屈がつくられていた。ギラルドゥス自身も征服者の子弟として育てられ、同様な認識を共有していた。ただし、彼は4分の1ではあるがウェールズ王家の血統をひき、生育地、勤務地ともに南ウェールズであったから、自分のウェールズ評価が自身に跳ね返る立場にいた。当然彼のウェールズ評価は複雑になる。

ギラルドゥスは次のように述べている。

(3-5) イングランド王宮の人々は妬みや悪意からしばしば「ウェールズに何か優れたものが[生まれると]期待できるのか」などと言い散らして、私をさげすんだ。……私が小さな失敗をすると、まるでそれが生まれに由来することであり、ウェールズに根ざしたものであるかのように、「[また], ウェールズ [人ならでは] のへまだ」と言われた。

しかし、私の考えでは、そしてこれは事実であると確認されているのであるが、よく統治された地域でも悪人を生み出すことがあるように、統治の行き届いていない人々や野蛮な地域が時々ではあっても善良で学識に富む者を生み出すことがある。場所が立派な人物をつくるのではなく、むしろ、賞賛される人が彼の地域の名声を高めるのである⁽⁴⁷⁾。

2点説明しておこう。

前半部分でギラルドゥスは同僚とも言うべき王宮の人々からウェールズ人とみなされ軽蔑されたと記しているが、これは先行する著作には見られない新しい情報である。ヘンリ二世の偏見だけを取り上げている先行著作に比べて範囲が広がっている。なお、後半部分は一般論を展開しているが、これを近代的なレイシズム批判と理解するのは時代錯誤であろう。彼の真意は自分をウェールズ人と決めつけて蔑視する人々への非難であると考えてよい。

実際、ギラルドゥスは次のように述べている。

(3-6) 私は4分の3 アングロ・ノルマン人の血統に属し、人の性格形成に大きな力をもつ生育環境は完全にアングロ・ノルマン人のものであったし、人の第2の性格をつくると言われる居住地域も同様であった。しかし、私に敵意をもつ人々は「[私の] 4分の1の系譜が[私] 全体を、まるで小さな菌によって塊[全体]が腐るように、汚している」と決めつけた。

「私はアングロ[・ノルマン]人の中で養育され、[彼らと]付き合ってきたこと、また、私の生[地がウェールズで]、親族もウェールズにいること、この[2つの事実]から、[アングロ・ノルマン人とウェールズ人の]どちらもみな私を他国の人、自分たちとは違う人間であるとみなした。彼らはいつも継母のような目で[私を]眺め、一方は[アングロ・ノルマン人の親族ゆえに]私に疑いをもち、他方は[ウェールズ生まれゆえに]私を強く憎んだ⁽⁴⁸⁾。」

ここで重要なのは、自分はアングロ・ノルマン貴族の子弟であって、彼らの中で生活してきたことを強調している点、および、イングランド王宮の人々だけではなく、ウェールズ人支配者たちも彼を敵方の者と見なしたと記している点である。後者は彼の判断であるが、おそらくそう考えざるを得ない待遇を彼は受けたのであろう。単なる筆の滑りとは考

えられない。

一般的に言って、不用心に出自の二元性を振り回すとこのようなジレンマに陥りやすい。王宮を辞した直後のギラルドゥスはこの点を実感し、悔みながらも周囲の人々の誤解に腹を立てていたのではなかろうか。

本節は『君主の訓育』の「オリジナル序文」からギラルドゥスの思考や心境を探るために3種類の記述、すなわち、イングランド王宮に関する記述、ヘンリ二世に対する批判、王宮のギラルドゥス蔑視に対する反論を選んで検討してきた。結論を繰り返す必要はないが、3種の記述に共通している点をひとつ挙げておこう。それはいずれの点においても彼の思考や心境が一義的に語られていないことである。具体的に言えば、まず、イングランド王宮を辞したことを喜びながら、そこで重ねた自分の努力はまったく実を結ばなかったという強い不満をもっていた。次に、ヘンリ二世に対して人格にまで及ぶ厳しい批判をしながら、第1巻が長らく公表されなかったことから分かるように、著述がもたらすリスクを慎重に見極めようとしていた。彼は王宮を恐れていたのである。最後に、イングランド、ウェールズ双方の支配者たちから信頼されなくなっていることに気づき、戸惑いながらも自分をウェールズから切り離すことはできなかった。

表面は平穏な研究生生活のスタートであったが、内心で彼は大きく揺れていたのである。

Ⅳ 「第1巻」

まず『君主の訓育』第1巻の構成を簡単に紹介する。

全体は序文（「第1巻序文」）と21の章から構成され⁽⁴⁹⁾、そのうち14の章が具体的な君主の徳目を挙げている。残りの7章は統治の理念に関する3つの章、神と君主の関係に関する2つの章、君主の死にぞまに関する2つの章に分かれる。

徳目に関する14の章はほぼ共通の構成になっている。まずその章で取り上げられる徳目がなぜ君主にとって必要なのか、身につけるとどのようなメリットがあるのか簡潔に説明され、続いてその徳目に関する古代以来の記述が引用も含めて多数紹介されている。分量で言えば、前者より後者の方がはるかに多い。さらに、テーマとされている徳目とは無縁だが、先行する文章と何らかの意味で関係があると判断された文章が付加されている場合もある。このように追記が重ねられた結果、ひとつの章としてのバランスが失われ、テーマに沿った筋立てが見えにくくなっている場合も少なくない。さらに、第1巻には完成後に、おそらく第2、第3巻執筆時に追加された文章が含まれていると推測されるが、一

部を除きその所在は確認できない⁽⁵⁰⁾。

このように複雑な構成をもっている第1巻をどのように利用したらよいか。後の追加と分かっている部分は当然除くとして、私は各章の冒頭で徳目を紹介している文章に焦点を当て、他の引用文などは彼自身の徳目に関する考え方が読み取れるものだけを拾い上げることにした。検討対象を大幅に狭めたわけで、第1巻を正しく扱ったことになるか不安はあるが、大きな見落をせずに検討可能であると判断した。

もうひとつ不安な点がある。それは王宮を辞した直後に完成していた第1巻からどこまで1190年台前半のギラルドゥスを知ることができるかという点である。第1巻は、その分量から判断して、執筆に相当の時間を要したはずである。引用文などは手元に他の著作家たちの書物をおき、すばやく筆写なり翻案していったと推測されるが、それでも200ページ分の文章を王宮辞任後の1年あまりで書き上げるのは難しいだろう。とすれば、ギラルドゥスはそれ以前から第1巻を書き始めていたと考えるのが自然である。

しかし、前節で取り上げた事項とは異なり、彼の君主に関する考え方は王宮辞任によって大きく変わったとは考え難く、そうした言及もない。そこで、私は第1巻の内容が、後の追加部分は別として、全て1190年代前半のギラルドゥスを伝える手掛かりとなるとみなすことにした。

以下第1巻の内容を「第1序文」と本文に分けて紹介する。

「第1序文」には次の点が記されている⁽⁵¹⁾。①『君主の訓育』の執筆を思い立った理由。②統治者の権力は神の賜物であるが、支配者はしばしばこの点を忘れ、専制者になってしまう。③本書は3巻構成であり、第1巻はあるべき統治者の姿を示し、第2、3巻では先例を引きながら統治の方法を具体的に述べる。④本書が自分に利益をもたらすと期待していない。⑤本書を献呈するとすればフランス王ルイがふさわしい。

先に③と⑤について簡単に説明しておこう。③から、第1節で述べたように、ギラルドゥスは当初より3巻で構想し、各巻の基本的な役割も決めていたことが分かる。⑤は仮定の話であって、実際には誰にも献呈されていない。ただし、彼が贈与先としてイングランド王宮の有力者ではなく、フランス王を思い浮べていた可能性があり、もしそうならば、彼のイングランド王宮に対する反感を示す記述となる。

①②についてギラルドゥスは次のように語っている。

(4-1) 私が『君主の訓育』を書こうと思い立ったのは、現在の聖・俗の支配者たちの行動が口頭での批判を超えるものになっているからである。本来支配者は「権力のみによって〔支配するの〕ではなく、模範を示すことで人々を統治すべき地位にいるはずなのだが、……今日どの支配者が王の塗油という聖なる儀式的の意味に注意を払っているだろうか。」こうした支配者たちの姿を見て本書を構想したのである⁽⁵²⁾。

まず、後半部分から統治者とその権力に関するギラルドゥスの基本的な考え方が分かる。聖職者として当然とも言えるが、神の教えや意図に反した行動をすれば支配者はそれだけで失格であり、専制者、暴君になると彼は考えていた。支配者の身につけるべき徳目はすべてこの前提条件を満たして成立するものであった。

次に、前半部分について私の推測を加えながら説明しよう。

1184年に王に請われて王宮付き司祭となったギラルドゥスは、その生活に慣れるとともに王宮の人々を批判的な目で観察するようになった。批判の根拠ないし基準は1160年台後半から70年台前半にかけてパリで学んだ新しい理論、すなわち、王を含めた世俗の支配者たちは神、したがって、ローマ教皇を頂点とする聖界が定めた教えに従うべきだという考え方である。彼がこうした信念をもっていたことは間違いないが、他方で彼は現実の政治世界で神の教えに反する暴力や力の論理が横行していることも承知していて、これと妥協するすべを身に着けていた。しかし、王宮で身分が上の多様な支配者たちと付き合ううちに、彼からすれば不当な、あるいは、過剰な妥協を要求されることが増え、心の中で反論を繰り返していたと思われる。そうした反論が組み立てられてあるべき君主の像にまとまっていったのではなかろうか。先行する4著作と同様に、『君主の訓育』も自分の経験、それも苦い経験をふまえて構想されたのであって、単に古代以来の作家たちの真似をしているのではない。

④についてもギラルドゥスの文章を引用する。

(4-2) 私はこれまで聖・俗の支配者たちのためにいくつか著作を発表してきたが、執筆の労に見合う報酬を得たことがない。そこから判断すると、この新作も、内容は素晴らしいのであるが、人々が私に対して抱いている「[ウェールズ]生まれゆえの悪意に満ちた憎しみ」を考えると、むしろ憎しみ、ねたみ、敵意をもたすだけだろう⁽⁵³⁾。

先行著作に比して彼は弱気である。何か具体的な事情があったのかもしれない。

第1巻本文は章ごとに要旨を紹介する⁽⁵⁴⁾。ただし、章全体の要旨というよりも、私が高稿にとって重要であると判断した部分をごく簡潔にまとめたものである。

第1章「支配者の統治 (moderamen) について」

人間にとって、また、王国の保全のためには統治する力が不可欠である。統治者がいなければ人々は滅亡する。統治者に抵抗する者は神の命に反していることになる。ただし、王はまず自分を制御した上で人々に服従を求めるべきである。また、多くの人々の目を意識し、彼らに不快な思いをさせないように留意すべきである。

第2章「支配者の親近感 (mansuetudo) について」

支配者はおごることなく、臣下と同等、あるいは、下位の存在と自認して行動するの

がよい。支配者の権力は法の権威に大きく依存している。法は支配者がもつ権力よりも重要である。支配者にとって、恐れられるよりも愛されるほうが利益となる。

第3章「支配者の恥じらい (verecundia) について」

恥を知る能力は高貴な人の印である。また、第2章のおごらない性格に通じる。支配者は自他の恥ずべき行動を許さないよう留意すべきである。

第4章「支配者の節操 (pudicia) について」

支配者は恥ずべき行為をしないよう節操を守るべきである。これは第3章の恥じらいと近い関係にある。節操の中で特に、肉欲に溺れて精神の自由を失わないようにすることが大切である。

第5章「支配者の忍耐 (paciencia) について」

忍耐は第2～第4章で挙げた徳目よりも重要である。特に多くの人々を統治する君主にとって不可欠な資質である。忍耐は他の徳目に力を与える。家臣を罰する時には支配者は忍耐力を発揮し、よく状況を知った上で決断すべきである。

第6章「支配者の自制 (temperancia) について」

君主は何事があっても怒りにまかせた行動に走らないよう自制すべきである。自制して、穏やかな振舞が第2の天性になるのがベストである。自制は他の徳目が程良く発揮され、維持されるためにも重要である。

第7章「支配者の寛容 (clementia) について」

寛容ほど人々を輝かせる徳目はない。特に王などの支配者にとって重要である。支配者は、統治に不可欠な場合は別として、違法を責め立てるよりも許す方針で判定するのがよい。個人的な敵であれ、敵国の者であれ残酷に処分すべきではない。

第8章「支配者の気前の良さ (munificencia) について」

気前の良さは寛容と同様に高位の人にもふさわしい徳目で、気前良くすれば統治も容易になる。ただし、限度を心得る必要があり、過大な気前よさは自他ともに不利益をもたらす。

第9章「支配者の威厳 (magnificencia) について」

威厳は支配者を引き立てる。権力をもつ者が身につけるべき徳目である。ただし、軍事的な威厳を誇示しすぎると戦闘につながる恐れがあり、慎重さが必要である。

第10章「支配者の正義感 (iusticia) について」

正義感ほど支配者にふさわしい徳目はない。支配者が正義に従って統治すると社会の結束が高まる。支配者は武力によって国を守るだけでなく、法と裁判によって国を支配し、導くべきである。神の正義、地上の正義ともに尊重されるべきである。ただし、全てのことに正義を厳格に追求すると、結果は必ずしも良くない。むしろ、支配者の正義

感最後の切り札にするのがよい。正義感はぶれずに、等しく発揮されるべきである。

第11章「支配者の思慮深さ（prudencia）について」

支配者の思慮深さは他の徳目に磨きをかける。他の徳目が過大にならないよう注意する際に役立つ。次々と決断を迫られた時に特に必要となる。支配者を支えるのは、正義感、勇気、自制、思慮深さである。

第12章「支配者の先見の明（providencia）について」

先見の明は第11章の思慮深さを構成する要素であるが、特に重要な点なのでひとつの徳目として挙げる。支配者が先見の明を発揮すると国は安定する。何か問題が生じないか慎重に予測し、人間の力が及ぶ範囲で悪しき結果を回避することが大切である。

第13章「支配者の温和さ（modestia）について」

温和さは自製の要素である。怒りの暴発を抑え、野心を制御する力をもつ点で重要である。

第14章「支配者の勇気と勇敢さ（audacia et animostia）について」

勇気と勇敢さほど偉大な人、幸運な人にふさわしい徳目はない。ただし、思慮を欠いた行動とはっきり区別すべきである。勇気は男らしく理性を働かせて何かを試みる時に発揮される徳目である。

第15章「支配者の栄光と高貴さ（gloria et nobilitas）について」

栄光ある支配者は配下の人々に安心を与える。ただし、栄光を求めすぎると結果はよくない。支配者の真の徳は彼の高貴な精神に根ざす。

第16章「王と専制者（tyranus）との違い」

王は、戦時には武器を取って、平時には法に従って人々を統治すべきである。また、戦時、平時ともに王は模範を示して人々を導くべきである。それに対して、専制者はどのような時も人々の安寧に配慮せず、人々を導こうとしない。専制者は悪しき例を示すことによって、人々の利益を重視するよき支配者まで墮落させる。王はその国の守護者であるのに対し、専制者は配下の人々に一方的に命令して困惑させる。

第17章「専制者たちの血にまみれた最期」（省略）

第18章「〔神に〕選ばれた君主たちの賞賛すべき生と死」（省略）

第19章「支配者の称号に関する説明」（省略）

第20章「支配者の信仰心と〔神への〕献身（religio et devocia）」

世俗の賞賛だけでなく、神の恵みも得た者だけが真の偉大な支配者である。よき支配者はその生活、業績いずれの点でも人々の手本となるべきである。特に信仰心でこの点は重要である。逆に、悪徳についても支配者は人々の手本になりうるので、そうならないよう支配者は慎むべきである。

第21章「支配者の心構え (intencia) と幸福な終焉」

支配者が目指すべきことを挙げる。①神に近づくよう努力する。②神に愛されるよう努力する。③神がよしとされる業績を成し遂げる。④神を愛し、次いで自分の心、身体、隣人を愛する。⑤信仰心が全ての基本であると自覚する。以上を総合して、支配者は神の意に即して生涯を送り、常に死の準備をしておくべきであり、そうすれば心安らかな終焉を迎えることができる。

第1巻の本文から本稿にとって重要だと思われる部分を簡潔に紹介した。ここから何を引き出せるか、私の考えをまとめておこう。

ギラルドゥスは君主論の前提として、世俗界の頂点に立つ人も神の教え、したがって、ローマ教会の指導に従うべきだと考えている。世俗の支配権は神が授けたものだからである。聖職者として当然の考え方であるが、ギラルドゥスの思考の出発点であり、『君主の訓育』では第1巻と第2、第3巻をつなぐ糸となっている。

その上で、ギラルドゥスは君主が身につけるべき14の徳目を挙げている。いずれも彼が創出したものではなく、先人たちからの借用である⁽⁵⁵⁾。したがって、彼の創意は徳目間の位置づけや比重のかけ方に見られ、そこに彼が王宮で経験した支配者たちの言動に対する批判が反映している可能性が高い。

「親近感」、「恥じらい」、「節操」は君主だけではなく配下の人々にも共通する徳目であるが、ギラルドゥスは君主が人々の手本を示すべきだと考えている。

特に君主にとって重要とされているのは「忍耐」、「自制」、「寛容」、「気前の良さ」、「威厳」、「正義感」、「勇気と勇敢さ」、「高貴さ」である。これらは2種類に分けて検討するのがよいだろう。第1のグループは高位者特有と言ってよい徳目で、「気前の良さ」、「威厳」、「勇気と勇敢さ」、「高貴さ」である。第2のグループは一般民にとっても望ましいが、リーダーとなるべき君主に強く求められる徳目で、「忍耐」、「自制」、「寛容」、「正義感」である。

他の徳目に力を与える、あるいは、不可欠であると記されている徳目がある。「忍耐」、「自制」、「思慮深さ」であり、これに「思慮深さ」の一要素とされている「先見の明」、および、「自制」の一要素である「温和さ」を加えることができる。

第11章でギラルドゥスは支配者を支える徳目として「正義感」、「勇気」、「自制」、「思慮深さ」を挙げている。前の2つは上の分類で君主特有のもの、後の2つは他の徳目に力を与えるものである。私は前者を君主の積極的な徳目、後者を消極的ないしブレーキ役の徳目と理解する。

全体として、ギラルドゥスは君主が積極的徳目を発揮するのは当然としつつも、これを消極的徳目によって制御し、バランスをとることが肝要で、前者だけでは配下の人々を納

得させる統治はできないと考えていたと言えよう。彼が積極的な徳目のいくつかで、恣意的ないし過大に発揮されるとむしろ悪しき結果を生むと記していること、また、消極的な徳目が重ねるように多数挙げられていることからの推測である。

本節の最後にギラルドゥスの生の声を伝えていると思われる文章を紹介しよう。第1巻を締めくくっている文章である。

(4-3)『君主の訓育』第1巻はこれで終わる。しかし、「我々の時代のある支配者が味わった成功、栄光、[そして]不名誉な没落を扱う2つの巻はまだ完全に[仕上がって]おらず、磨きもかけられていないので、[それらが]完成するまで[第1巻も]発表しないほうがよいと思われる。」というのも、嵐がやってくるかもしれない時には、著作を他人の目や耳にさらすよりも、「まるで存在していないかのように完全に隠し、……時期をうかがいながら、より安全で平穏な時[が来る]まで[発表を]延ばすのがよい」と考えるからである⁽⁵⁶⁾。

ギラルドゥスはここで第1巻だけ発表するという選択があったことを示唆している。第1巻だけで著作として成立すると判断していたのである。しかし、彼はこのアイディアを採らず、しかもその存在が人々に知られないよう秘密にしておくという措置を取った。理由は「嵐」、すなわち、身に危険が及ぶことを恐れたからである。彼が嵐の内容についてどれだけ具体的な想定をしていたか分からないが、第1巻完成時に大きな不安をもっていたこと、その不安の源がイングランド王宮との関係にあったことはほぼ間違いない。

彼は将来不安が解消されて自由に発表できる時が来てほしいと願っているが、それがいつ、どのような方法で可能になるのか、まだ見通しもついていたのだろうか。心理的に厳しい状況である。彼が何か情報を得ていたのか、それとも、ただ恐れていただけなのか不明である。いずれにせよ、第1巻を書き終えたギラルドゥスの心中は決して穏やかではなかった。

V おわりに

第3、第4節で得られた点を、ギラルドゥスの思考や心境に関するものと、彼の理想とする君主像とに分け、私の推測を加えて本稿の結論としよう。

1190年代前半のギラルドゥスは次のような思考や心境をもっていた。

彼は煩わしい王宮の仕事から解放され、これからは研究に専念できると喜んでいる。仕事だけでなく、王宮時代に彼がとっていた無理な政治的スタンスからの解放も大きかった

と思われる。そのためであろう、『君主の訓育』にはこれまでの著作にはない素直な感情の発露が見られる。

同じ開放感からであろう、彼はかつての主君であり、最大の後ろ盾としていたヘンリ二世を厳しく批判している。「第1序文」には、批判というよりも非難に近い表現が見られる。政策や行動の批判ではなく、王の品性を問題にしているのである。

ギラルドゥスがヘンリ二世を批判する理由は大きく分けて2つある。ひとつは、自分が王に仕えてそのウェールズ政策を懸命に支えたにもかかわらず、王は空約束するだけで、最後まで何の報酬も与えてくれなかった点、もうひとつは、王が神の教えに背く行為を重ねた点である。前者は、王がギラルドゥスのセント・デイヴィズ司教就任を拒否し続けたことを指し、後者の具体的内容は、王がトマス・ベケットの暗殺に関与した可能性が高いこと、および、ローマ教皇から要請された十字軍参加を渋り、イングランド王としての義務を果たさなかったことである。

王宮に対する彼の思考・心情はより複雑であった。彼は一方で王宮の生活に絶望し、王宮を後ろ盾とした栄達をあきらめていた。ヘンリの後継者であるリチャード一世から充分な支援を得られると考え難く、他の王宮メンバーに彼の能力を理解する人がいなくっていた⁽⁵⁷⁾。他方で彼は王宮の人々を恐れていた。彼らはギラルドゥスはウェールズ人であるからウェールズ人支配者たちと結託する危険性があるというヘンリ二世の偏見を共有していたからである。

そこでギラルドゥスは、『君主の訓育』自体が王宮の反感を買うことがないか神経をとがらしていた。理想の君主像を描いている同書の発表をためらい、第1巻を書き上げたところで中止したひとつの理由がここにある。「オリジナル序文」付きの第1巻は公表されず、この時期にはごく一部の人々の目に触れただけであった。

ここにみられるギラルドゥスは、数年後にあえて王宮と対決した時とはまったく違って、極めて慎重、あるいは、弱気である。王宮に対する期待はもたないが、その意向を無視することはできない状況である。これは聖職者とはいえ王権のもとで生活するのであれば当然のことであるが、王宮以外のどこに栄達への道が見つかるのか分からぬまま逡巡するという苦しい心境だったのではなかろうか。

こうした王宮に対する意識からであろう、ギラルドゥスは王宮の人々がもっているウェールズ人・社会に対する蔑視を強く批判している。ウェールズ人が間違いを犯せば、それはウェールズ生まれだからだと決めつけるが、これは間違いで、この地にも優れた人物がいるというのである。彼の念頭にあるのは言うまでもなく自分自身であり、一般論の形をとっているが近代的なレイシズム批判ではない。

ギラルドゥスをウェールズ人と決めつけて冷遇するのはヘンリ二世が始めたことである

が、王が死去し、彼が王宮を離れた後もこの問題にこだわっているのはなぜか。もしギラルドゥスが本当にセント・デイヴィズ司教就任をあきらめ、研究に専念するつもりでいたのならば、もはや過去の不遇を記す必要はあまりなくなる。この際うっぴんを晴らしてやろうと思ったのかもしれないが、それはまた危険を招来しかねない。私は、『君主の訓育』に記されたウェールズ人差別への批判は、彼がセント・デイヴィズ司教就任の夢をあきらめていなかったことの表れではないかと考える。あきらめていなかったから、これまで夢の実現を阻んできた偏見が許せなかったのではなかろうか。

以上の推測が当たっているとすると、新しい栄達への道を探っていたギラルドゥスにとって、王宮とは別に大変心配な状況が発生していたことになる。それは、彼がヘンリ二世の命で、王の意を汲んでウェールズ人支配者たちとの仲介役を務めるうちに、ウェールズ人側の信頼が失われていったという、彼にとっては思わぬ結果である。彼は先行著作の中で、王宮の偏見については何度か言及しているが、ウェールズ人支配者たちのまなざしにはまったく触れていない。職務上彼らの全面的信頼を得ているという前提で行動していたのであろうか。王宮の愛顧を得て司教に昇進する道が閉ざされたままであるならば、別の後ろ盾となりうるウェールズ人支配者たちの支援が重要になる可能性が高く、彼らの不信任は大きな負の意味をもつ。彼はとまどっていたのではないか。

『君主の訓育』第1巻が取り上げている徳目については以下の点が確認できた。

ギラルドゥスは先人の君主論をよく踏まえて議論を展開しており、取り上げた徳目の種類やその内容理解に関しては彼独自のものはない。ここから同書第1巻は退屈だという評価が生まれる。

しかし、彼は人まねをしているのでは決してない。独自の目的と方法をもって1190年代のイングランド、ウェールズで大きな意味をもつ君主論を展開しようとしたのであって、その点では成功している。難点は彼があとから大量かつ多様な事例を追加したことで、結果として、読み通すのに時間がかかり、その割には新味がないと感じる著作になってしまった。彼の独自性は次の2つの点に見られる。ひとつは、自分の王宮生活の経験を踏まえての記述であること、もうひとつは、14の徳目間に独自の比重を付けたことである。

前者は、『君主の訓育』全体の構想、執筆を通じて彼を動かしていたいわば原動力であった。先行著作でも彼は自分がよく知っている地域の地誌や歴史を、主として自分の体験を基に著述していたが、それと同様に、自分の体験を生かしてあるべき君主の姿を描こうとした。そう私は推測する。

他方、2つの点で先行する作品と違っている。ひとつは、先行作品が自分の体験や知識がそのまま生きる方向性をもっていたのに対し、今回は逆の方向性、すなわち、自分の経

験がいれば反面教師になっていることである。

もうひとつは、作品の評判にかかわる点で、先行作品はいずれも王宮のために書かれ、王権に利益をもたらす内容であるのに対して、『君主の訓育』は、そのタイトルとは裏腹に、王権の不興を買う危険性の高い内容を含んでいる。単に王権を批判する言及が含まれているのではなく、ヘンリ二世の生涯を神の教えに反したため悲惨な晩年を迎えたという筋立てになっている点、また、現実に「オリジナル序文」で痛烈な王批判を行っている点は、筆の滑りといった弁解が通用しないから、王宮の反撃ないし懲罰を覚悟しなければ発表できなかった。ギラルドゥスがこの危険性をよく認識していたことは上で紹介した。

徳目間の比重については、2つの点を挙げておこう。第1に、彼は君主に特別要求されるものだけではなく、一般の人々も身につけるべき徳目を広くあげている。君主だけに視野を絞らなかつたのは、神の前では君主も一般の人々もまずは同じであり、君主は神に与えられた特権を生かして人々に模範を示すべきと考えていたからである。

第2に、君主の徳目が最もよい形で発揮されるためには、「忍耐」、「寛容」、「自制」、「思慮深さ」が必要であるとしている。いずれも常識的な徳目であるが、似た徳目を重ねるように並べ、いずれも他の徳目を輝かせるという位置づけが与えられている。あえてまとめれば「中庸」の徳である。おそらくギラルドゥスは、支配者たち、特にヘンリ二世が自分を信ずるあまり、とかく極端に走りがちだったこと、その決断によって周囲の者がしばしば困惑させられたことを踏まえてこれらの徳目を強調しているのであろう。

彼自身も中庸ないしバランス感覚が不可欠な場で生活していた。それは、彼の出自の二元性や仲介的な仕事を思い浮かべれば分かる。彼はアングロ・ノルマン貴族の子弟であったが、常に母に由来するウェールズ王家の系譜を意識し、この系譜を生かしてイングランド王権のウェールズ政策を助けていた。基本的に対峙していた王権とウェールズ人支配者たちのいずれかのみに身を置くのは彼にとってはタブーに近く、中立性を無視すれば身の破滅につながりかねなかつた。ギラルドゥス生来の、そして、成人後に磨きかけたバランス感覚が徳目間の比重となって姿を見せている、そう私は考える。

註

第1節

- (1) [7] Giraldus (Warner (ed.)). [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)).
- (2) 以下の説明は、パートレットが上記校訂本に付した解説に基づいて行う。[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xi~lvi.
- (3) [9] Giraldus (Brewer (ed.)). [20] Giraldus (Lefevre & Huygens (eds., trans.)).
- (4) [16] Giraldus (Scott & Martin (eds., trans.)), p. xlv. [37] Rooney.
- (5) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. lx. [18] Giraldus (Stevenson (trans.)), p. 6.
- (6) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxiii.

- (7)『アイルランド地誌』－[1] Giraldus (Dimock (ed.)). [23] ギラルドゥス (有光 (訳)).
『アイルランド征服』－[2] Giraldus (Dimock (ed.)). [16] Giraldus (Scott & Martin (eds., trans.)).
『ウェールズ旅行記』－[3] Giraldus (Dimock (ed.)). [26] Giraldus (Thorpe (trans.)).
『ウェールズ案内』－[4] Giraldus (Dimock (ed.)). [28] Giraldus (Thorpe (trans.)).
- (8) [31] Bartlett, pp. 69～100.
- (9) 19世紀にステイヴンソンが『君主の訓育』の中からヘンリ二世に関する記述を集めた抄訳を出版した。[18] Giraldus (Stevenson (trans.)).
1970年代に出版されたギラルドゥスに関する代表的な研究書、啓蒙書には同書に関する言及はない。
[36] Richter. [34] Miles.
- (10) [31] Bartlett, pp. 69～91.
- (11) [32] Henry & McMullen (eds.).
- (12) [32] Henry & McMullen (eds.), p. 5.
- (13) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xi～lvi.
- (14) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xiii～xv.
- (15) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 432～33.
- (16) 19世紀末にワーナーは1192年から96年の間とし、20世紀後半にバートレットは1195年ころと推定していた。[7] Giraldus (Warner (ed.)), pp. xvii～xviii. [31] Bartlett, p. 69.
私は、ギラルドゥスが『自叙伝』で王宮を辞した後留学のためにパリへ向けて出発したが英仏間で戦いが始まったので断念したと記していること、および、この戦いが英王リチャード一世が捕囚から解放された後に始まっていることから、王宮辞任はその直前、おそらく1194年だったと推定していた。[5] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 89. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 75.
- (17) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. xv～xvi.
- (18) [5] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 85, 87. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 69, 70.
- (19) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxii.
- (20) [43] 永井を参照。
- (21) [42] 永井, [43] 永井, [45] 永井。ほかに [40] 永井, [41] 永井, [49] 永井もギラルドゥスの生涯を部分的に扱っている。
- (22) この時期にかかわる『自叙伝』の記述は次節で取り上げ、検討する。
- (23) [46] 永井, [47] 永井, [48] 永井。ほかに [39] 永井, [45] 永井も同じ関心を含んでいる。
- (24) 本稿では検討できないが、続稿の準備となる作業が次節以降に含まれている。それは、『ウェールズ案内』末尾でギラルドゥスが記している2つの矛盾含みの提案と『君主の訓育』で彼が展開している議論とがどのようにかわるのかという問題である。矛盾含みの提案については、[39] 永井を参照。

第2節

- (25) [3] Giraldus (Dimock (ed.)). [26] Giraldus (Thorpe (trans.)). [5] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 89. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)). [10] Giraldus (Brewer (ed.)).
- (26) [5] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 89. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 71.
- (27) [5] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 85, 87. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 69, 70.
- (28) [5] Giraldus (Brewer (ed.)), p. 93. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 74～75.
- (29) [5] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 89～91. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), pp. 72～

74.

(30)[42] 永井, 第 2～第 4 節を参照。

(31)[43] 永井, 第 4 節を参照。

(32)[5] Giraldus (Brewer (ed.)), pp. 93～94. [29] Giraldus (Rutherford (ed., trans.)), p. 75.

(33)[43] 永井, 第 4 節を参照。

(34) これまで言及しなかった著作の校訂本を挙げる。

『教会の鑑』 - [9] Giraldus (Brewer (ed.)).

『メネヴィア大司教聖デイヴィッド伝』 - [11] Giraldus (Brewer (ed.)).

『ヨーク大司教ジョフレイ伝』 - [12] Giraldus (Brewer (ed.)).

『聖エセルベルト伝』 - [13] Giraldus (Brewer (ed.)).

『教会の宝石』 - [6] Giraldus (Brewer (ed.)).

第 3 節

(35)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 2～33.

(36) イングランド王宮で共有されていた人種偏見については, [38] 有光所収の諸論文が示唆に富む。

なお, 私は, 王宮でギラルドゥスが担った役割はこの偏見をつくりだすことではなく, 既に共有されていた偏見に資料を提供することにあつたと考えている。ギラルドゥスの影響力が生まれたのは, 後世の人々が彼のウェールズに関する記述の中から自分たちの偏見に都合のよい部分を取り上げて利用した時である。

(37) たとえば, [3] Giraldus (Dimock (ed.)), p. 7. [26] Giraldus (Thorpe (trans.)), p. 68. [41] 永井, 第 5, 第 6 節を参照。

(38) 第 4 節の史料 (IV-3) を参照。

(39)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 2～3.

・ ・ ・ curia curarum gentrix, et scola deliciarum.

(40)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 20～21.

・ ・ ・ in portu nauigare post naufragium cepi.

(41)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 6～7.

・ ・ ・ tamquam a pelagi profundo tranquillos intra sinuosi portus angulos constitutus.

(42)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxii.

(43)[46] 永井, 第 4 節。

(44)[47] 永井, 第 5 節。

(45)[48] 永井, 第 3 節。

(46)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 2～5.

・ ・ ・ nichil minus menti quam non mentiri, nil desiderio magis quam decipere, quam dif-
fere, quam sequentium animos et absequentium dilationibus cruciare.

・ ・ ・ nihil ab illis preter inanes uexationes et uacua ueris promissa suscepi, ・ ・ ・ si quid
enim gratie morum grauitas, si quid litere, si quid industria confere potuit, totum id suspectum,
totum infestum, totum exosum Gualle nomen ademit.

(47)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 4～5.

“A Kambria potestne aliquid boni esse?”

“Kambrie utium.”

(48)[17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 4～5.

・ ・ ・ ex quarta tamen parentialis propagationis columpra ・ ・ ・ contracta totum infici et

modico quasi ferment massam corrumpi,

Vnde et quoniam inter Anglos, ut diximus, nostra tam morum institutio fuerat quam conuersatio, in Kambria uero natio reperta est et cognatio, compactum est ex his et confectum, ut uterque populus me sibi tamquam alieum reputans et non suum, simper oculo respexerit nouericali, alter ob hec suspectum habens et alter exosum.

第4節

(49) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 34~433.

(50) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxvi.

(51) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 34~41.

(52) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 34~37.

. . . . alios tam exemplo quam potestate regere tenentur et informare

(53) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 36~39.

. . . . innata finalis temporis huius malicia odium

(54) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 40~433. 各章の所在ページは省略する。

(55) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), p. xxiii.

(56) [17] Giraldus (Bartlett (ed., trans.)), pp. 432~33.

Duo uero distinctiones de principis cuiusdem nostri temporis successibus et Gloria, et ruina postmodum eiusdem in ignominia, quoniam nodum exarate ad plenum uel expolita, consulcius esse uidebatur, tamquam non existents sic existant, securius simul atque serenius in publicum prodeundi tempus exspectent.

第5節

(57)特にカンタベリー大司教ボードウィン (Baldwin) が十字軍に参加して1190年に死去したのはギラルドゥスにとって大きな打撃となった。彼は大司教を案内してウェールズ各地で十字軍勸奨を行う中で信頼と高い評価を得ており、その支援を期待していたからである。

参考文献 (『君主の訓育』)

I 史料

(A) ギラルドゥスの著作と訳本

- [1] Giraldus Cambrensis: Topographia Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド地誌』)
- [2] Giraldus Cambrensis: Expugnatio Hibernica (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 5, H. M. S. O., 1867) (『アイルランド征服』)
- [3] Giraldus Cambrensis: Itinerarium Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ旅行記』)
- [4] Giraldus Cambrensis: Descriptio Kambriae (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 6, H. M. S. O., 1868) (『ウェールズ案内』)
- [5] Giraldus Cambrensis: De Rebus a se Gestis (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861.) (『自叙伝』)
- [6] Giraldus Cambrensis: Gemma Ecclesiastica (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 2, H. M. S. O. 1862) (『教会の宝石』)
- [7] Giraldus Cambrensis: De Principis Instructione (in Warner, George F. (ed.): *Opera Giraldi*

- Cambrensis*, vol. 8, H. M. S. O. 1891) (『君主の訓育』)
- [8] Giraldus Cambrensis: *Symbolum Electorum* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 1, H. M. S. O., 1861)
- [9] Giraldus Cambrensis: *Speculum Ecclesiae* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873) (『教会の鑑』)
- [10] Giraldus Cambrensis: *De Jure et Statu Menevensis Ecclesiae, Dialogus* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 3, H. M. S. O. 1863) (『セント・デイヴィズ教会の権利と地位』)
- [11] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Dividis Menevensis Archiepiscopi* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis* vol. 3, H. M. S. O., 1863.) (『セント・デイヴィズ教会大司教聖デイヴィッド伝』)
- [12] Giraldus Cambrensis: *De Vita Galfredi Archiepiscopi Eboracensis* (in Brewer, J. S. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 4, H. M. S. O., 1873.) (『ヨーク大司教ジョフレイ伝』)
- [13] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Ethelberti* (in [8] Giraldus Cambrensis: *Symbolum Electorum*) (『聖エセルベルト伝』)
- [14] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Remigii* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [15] Giraldus Cambrensis: *Vita Sancti Hugonis* (in Dimock, James F. (ed.): *Opera Giraldi Cambrensis*, vol. 7, H. M. S. O., 1877)
- [16] Giraldus Cambrensis, (Scott, A. B. & Martin, F. X. (ed., trans.)): *Expugnatio Hibernica, The Conquest of Ireland*, Royal Irish Academy, 1978. (『アイルランド征服』)
- [17] Giraldus Cambrensis (Bartlett, Robert (ed., trans.)): *Instruction for a Ruler, De Principis Instructione*, Clarendon press, 2018. (『君主の訓育』)
- [18] Giraldus Cambrensis (Stevenson, Joseph (trans.)): *Gerald of Wales concerning the Instruction of Princes*, Seeleys, 1858, reprint version 1991. (『君主の訓育』抄訳)
- [19] Giraldus Cambrensis (Davies, W. S. (ed.)): *De Invectionibus/The Book of Invectives of Giraldus Cambrensis*, *Y Cymmrodor*, vol. xxx, 1920. (『論駁』)
- [20] Giraldus Cambrensis (Lefevre, Y. & Huygens, R. B. C. (eds., trans.)): *Speculum Duorum, or a Mirror of Two Men*, University of Wales Press, 1974. (『二人の鑑』)
- [21] Giraldus Cambrensis: *Topography of Ireland* (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*), H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド地誌』)
- [22] Gerald of Wales, (O'Meara, John (trans.)): *The History and Topography of Ireland*, Penguin Books, 1951. (『アイルランド地誌』)
- [23] ギラルドゥス・カンブレンシス, (有光秀一訳): 『アイルランド地誌』, 青土社, 1996年。
- [24] Giraldus Cambrensis: *The Vaticinal History of the Conquest of Ireland* (in Wright, Thomas (ed.), Forester, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863. (『アイルランド征服』)
- [25] Giraldus Cambrensis: *The Itinerary through Wales* (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ旅行記』)
- [26] Giraldus Cambrensis: *The Journey through Wales* (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978). (『ウェールズ旅行記』)

- [27] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Wright, Thomas (ed.), Foster, Thomas & Hoare, Richard Colt (trans.): *The Historical Works of Giraldus Cambrensis*, H. G. Bohn, 1863) (『ウェールズ案内』)
- [28] Giraldus Cambrensis: The Description of Wales (in Thorpe, Lewis (trans.): *The Journey through Wales and The Description of Wales*, Penguin Books, 1978). (『ウェールズ案内』)
- [29] Giraldus Cambrensis (Rutherford, Anne (ed., trans.)): *"I, Giraldus", The Autobiography of Giraldus Cambrensis (1145~1223)*, Rhwymbooks, 2002. (『自叙伝』)
- [30] Giraldus Cambrensis (Butler, H. E. & Gillingham, John (eds., trans.)): *The Autobiography of Gerald of Wales*, The Boydell Press, 2005, (orig. 1937)

II 研究文献 (本文か註で言及している文献のみ)

- [31] Bartlett, Robert: *Gerald of Wales, 1146~1223*, Clarendon Press, 1982.
- [32] Henley, George & McMullen, A. Joseph (eds.): *Gerald of Wales, New Perspectives on a Medieval Writer and Critic*, University of Wales Press, 2018.
- [33] Henley, George & McMullen, A. Joseph: Gerald of Wales, Interpretation and Innovation in Medieval Britain. (in [32])
- [34] Miles, John: *Gerald of Wales, Giraldus Cambrensis*, Gomer Press, 1974.
- [35] Owen, Henry: *Gerald the Welshman*, David Nutt, 1904.
- [36] Richter, Michael: *Giraldus Cambrensis, the Growth of the Welsh Nation*, Aberystwyth, 1972.
- [37] Rooney, Catherine: The Early Manuscripts of Gerald of Wales. (in [32])
- [38] 有光秀行『中世ブリテン諸島史ーネイション意識の諸相』刀水書房, 2013年。
- [39] 永井一郎『『ウェールズ案内』におけるギラルドゥス・カンブレシスの二元性』、『国学院経済学』第57巻3・4号, 2009年。
- [40] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと12世紀南ウェールズの政治世界 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻1号, 2010年, 第59巻2号, 2011年。
- [41] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの自己認識とウェールズ評価 (I), (II)」『国学院経済学』第59巻3・4号, 2011年, 第60巻2号, 2012年。
- [42] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスのキャリア・デザイン (I), (II)」『国学院経済学』第62巻2号, 2014年。第62巻3号, 2014年。
- [43] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスとセント・デイヴィズ問題 (I), (II), (III)」『国学院経済学』第63巻1号, 2014年, 第63巻3・4号, 2015年, 第64巻1号, 2015年。
- [44] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスと『ブレコン大助祭問題』 (I), (II)」『国学院経済学』第64巻2号, 2015年, 第64巻3号, 2016年。
- [45] 永井一郎『『ウェールズ案内』を読み直すー著者ギラルドゥスの執筆意図を手がかりに (I), (II)」『国学院経済学』第65巻1号, 2016年, 第65巻2号, 2017年。
- [46] 永井一郎『『アイルランド地誌』を読むーギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図にかかわらせて』『国学院経済学』第66巻2号, 2017年。
- [47] 永井一郎『『アイルランド征服』を読むーギラルドゥス・カンブレシスの執筆意図にかかわらせて (I), (II)」『国学院経済学』第67巻1号, 2018年, 2号, 2019年。
- [48] 永井一郎『『ウェールズ旅行記』に見られるギラルドゥス・カンブレシスの政治的スタンス』『国学院経済学』第68巻1号, 2019年。
- [49] 永井一郎「ギラルドゥス・カンブレシスの帰属意識」『国学院経済学』第69巻1号, 2020年。

